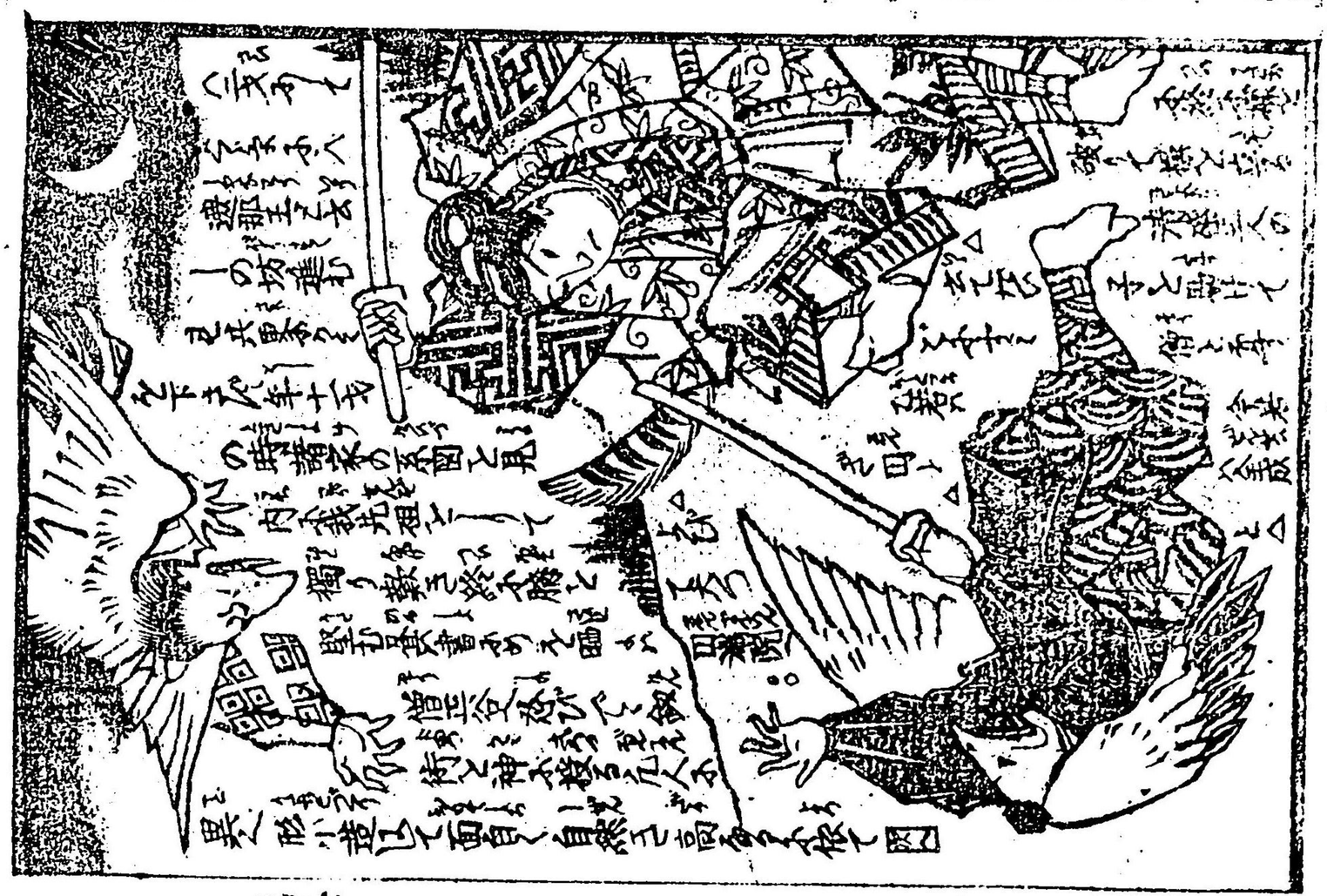
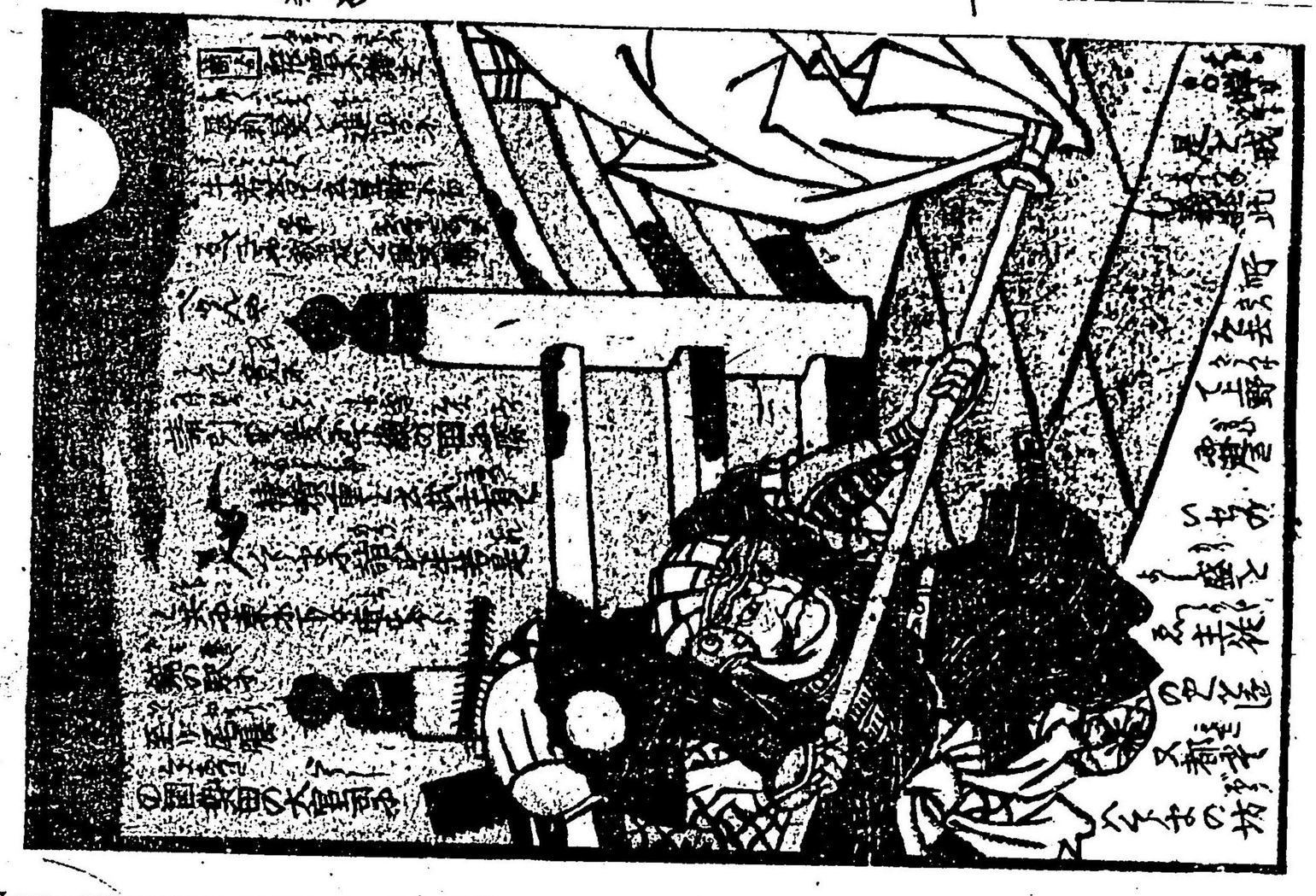
特42
864





義経此
是と戒
悔り
所を去て上野
の君
いせの
盛と
ふ主従
のことし
又都を
へくせの坊

官兵衛
くと学び
密ふ女房
づるふ通り
姫と
妻てひそせる
六韜三略と洛写
てまさもりて奥ぎを
極め何卒源家再興をさん
と志願して天下の英雄と
服しめんと欲ものを平げ
悔り
家い
山ふくき夕月出ぬ

△或夜五條の橋を熊野の別当辨慶の一子西塔のむさし坊辨慶と云う勇僧にて合△戦負て臣と成るなり

△討ん或へ逃散なり是より帝りあくむつを比叡山。次の計ひにて口秀ひら此時秀ひら金と云て此時義経秀ひら清ひら孫秀ひら鎮守府将軍と成。牛若之を身とせんと心を思ひ金賣吉次橋内と云ふ者くよ折ふし金賣吉次を牛若之と供を奥州へ下らんと頼む吉次牛若と伴うて奥州へ赴く呼ぶらの国青墓の近郷に熊坂大太郎と云ふ強盗あり吉次が荷物を奪ん〻と旅宿へ押入牛若を制て之を守る熊坂試に例の如く松明を投る牛若之を拂落切落三度て請て投返す熊坂怒つて大長刀を取直りて切る〻る牛若猛虎の如く躍り待て一刀に切倒す小賊どもは吉次らに共に陣代と義仲を君臣の約を成す或へ

△三品失脚の長者の女を奪ひ取り前を通ト或へ山野を奔走して むなしく無に兄頼朝きそつの討の宣旨を賜り駿河国の原に陣を張る此時義経秀ひら兄を面會兄の命と請て頼と

△義経

聞法殿下
安堵の思ひと
門尉が叙正又頼朝
賜る範頼義経と大将として
向ふ追て範頼搦手へ義経大将として三州山
とと行ふ道ある所を手り計ひもとの三郎と
ふ之ど妻内者として鵜越を出城のうしてより逆
落として破る平家四国落んと海上へ浮ぶ又讃岐の
抱て海へ入建礼門院も入水あり
しと伊豆の三郎と
と取り生捕
御台所
一形の下
是全く清
盛の業感
の報ひ
既に一門
滅亡
ぜし

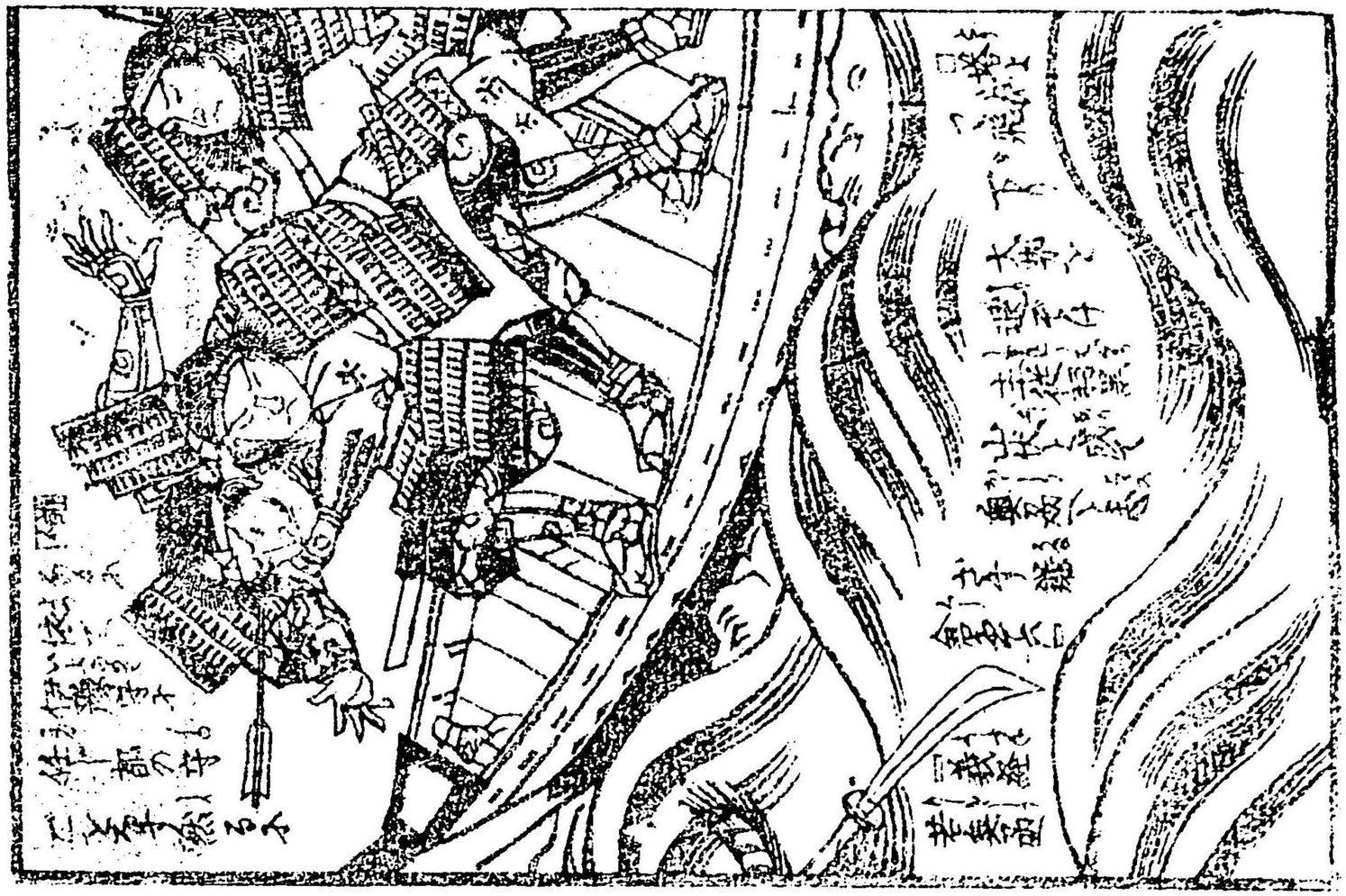
四国へ嶋ゆ佐藤嗣信義経に代りて能登守教経の矢
先に倒れ義経義経を迫る義経里舟へ越へ飛て身
とさけ教経憤激して秋の太郎次郎両人を脇殺
へ水中平家又長門の国壇の浦へ六日の夕の扇と竿
へ舟船へ押立宮女主上源氏の陣へ向ひ弓矢のてがら
あらば北扇といひ〳〵義経たれかあれとの
よとの命へ下野の住人奈須のと市宗高と名乗て
と矢へ海上十五段程進み船へ立て扇の浪へ
揺くとと中ほど満月の如く引絞り発
八幡宮と祈念して切て放せおのやうと扇の
要と射切り〳〵と相方鳴も止ぎし
べ大将与市ゆ宮屋の嘉美として せてぜ盃へ
酒と賜る平家終へ力尽て二位殿へ安徳帝と。

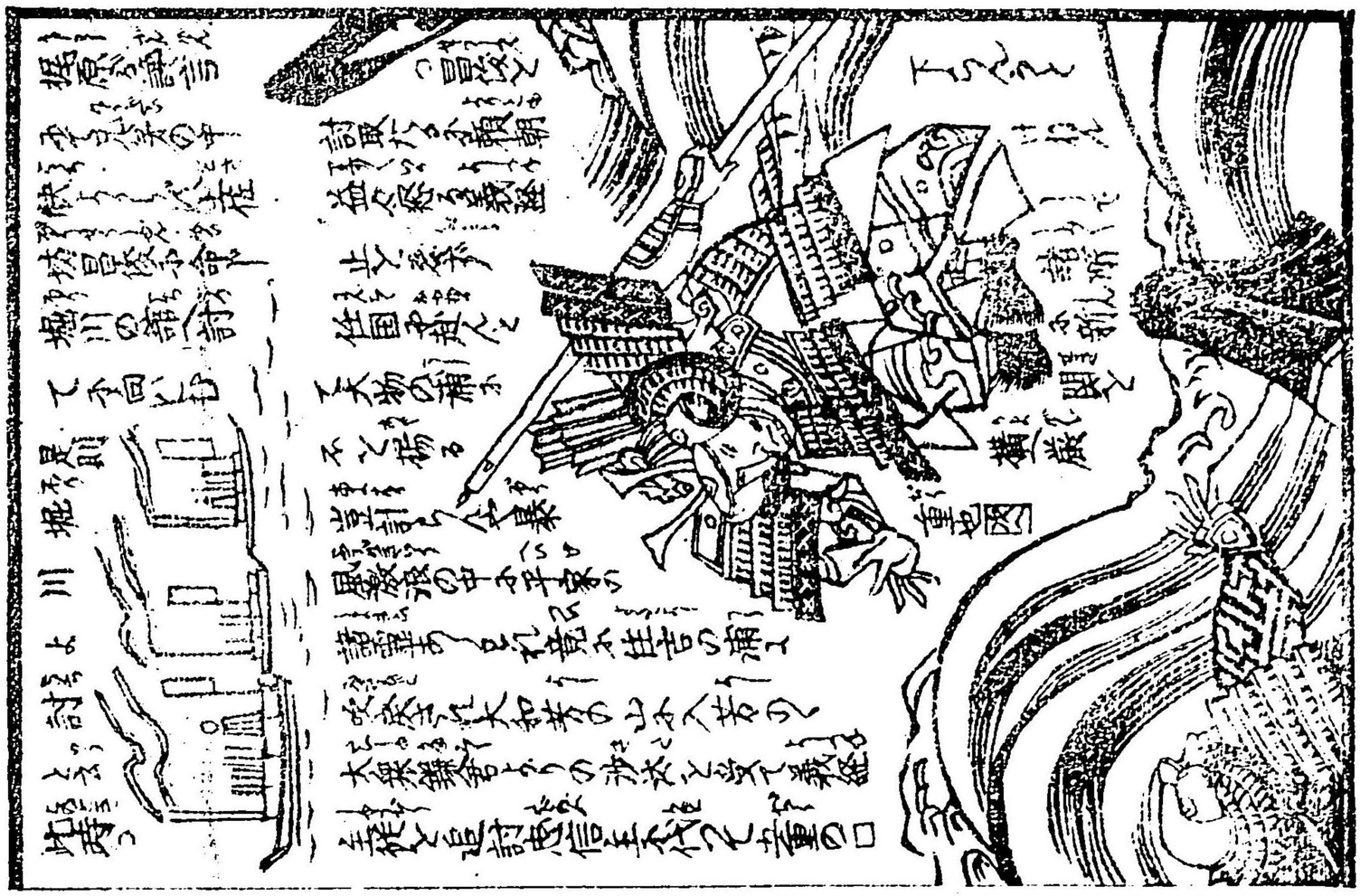
源氏
の勇
軍
帰陣
三種
の神
器を
奉
撃本
船へ
其功
莫大

聞人殿下
安堵の思ひと
門司の叙位又頼朝
勝る範頼義経と大将として摂津一の谷へと発
向と追て範頼搦手へ義経大将として三州山
ゝを一行の道あさ所を手り計ども三郎と
ゝ之と京門者として鵜越を出城のうしてより逆
落として破る平家四国落んと海上へ浮ぶ又讃岐の
○抱て海へ入建礼門院も入水あり
と伊豆の三郎之
と取て生捕
御伽しみ
一形あるとど
是全く清
盛の長時
の敵入
既へ一門
残ら
亡
ぬ

思八嶋へと入佐藤嗣信義経へ代りて能登守教経の矢
先へうしろ義経へ迫る義経畳船へ被と飛て身
をかけく教経憤激して我の太郎次郎両人を刺殺
入水せ平家又長門の国壇の浦へ六日の夜の扇と竿
へ舟へ押立官女玉虫源氏の陣へ向ひ弓矢のてなぶり
あらば北扇といひ義経たれうあるあれとい
よとの命へ下野の住人太奈須のゝ市宗高と名乗馬
と乗入海上十五段程進ム船へ立る扇の浪へ
揺くとときもの上へ満月の如く引絞り弓へ
八幡宮と祈念して切て放せいあやまつ扇の
要と射切りいさりやくと相方鳴も止ぬ
ば大将与市へ当座の褒美としてせうぶ盃へ
酒と賜る平家終へ力尽て二位殿女徳帝と。

源氏の勇
敵ひ敵
帰陣
三種の神
器へ
都へ
納め
其功
英大





加賀の国安宅川にて富樫の助ゞ新関に咎めらるを弁慶臨氣應変の辯と振ひ勧進帳の空讀として主君と杵掌り関守と謀り
虎の尾と踏の思ひにて此所と過ぬ国路へ出て辺ゝに入り
秀ひらに再會を誓ひ秀ひら没して後錦戸太郎国ひら郎次郎義ひら兄く泉の三郎虎ひら父の遺言と守り義経と守でゝ雖ども鎌倉より大軍
さし向けられと手とへて竟に高舘も落城に及
びしゝ義経我に似寄の者として自殺させ
首と鎌倉に送る頼朝舎弟と見て怒り
つゐに奥原父子の身
の上に及ぶ郎舘
次郎と初め其外
○海尊北海に入そ
地有と知て自ら業門考
と成て青森より
□主従船
に乗り地へ
渡り此
国と
切従へ
国王と
称し
後に
義経に
大

亡び弁慶へ
衣川に
立
往
生
明神
と尊む本朝を
へ武器に於て此將の右に出る
者へ有まゝと思る名將也
鳥ゆめ其外
皆夫に討死
時に文治
三年義経年
三十七
常陸坊

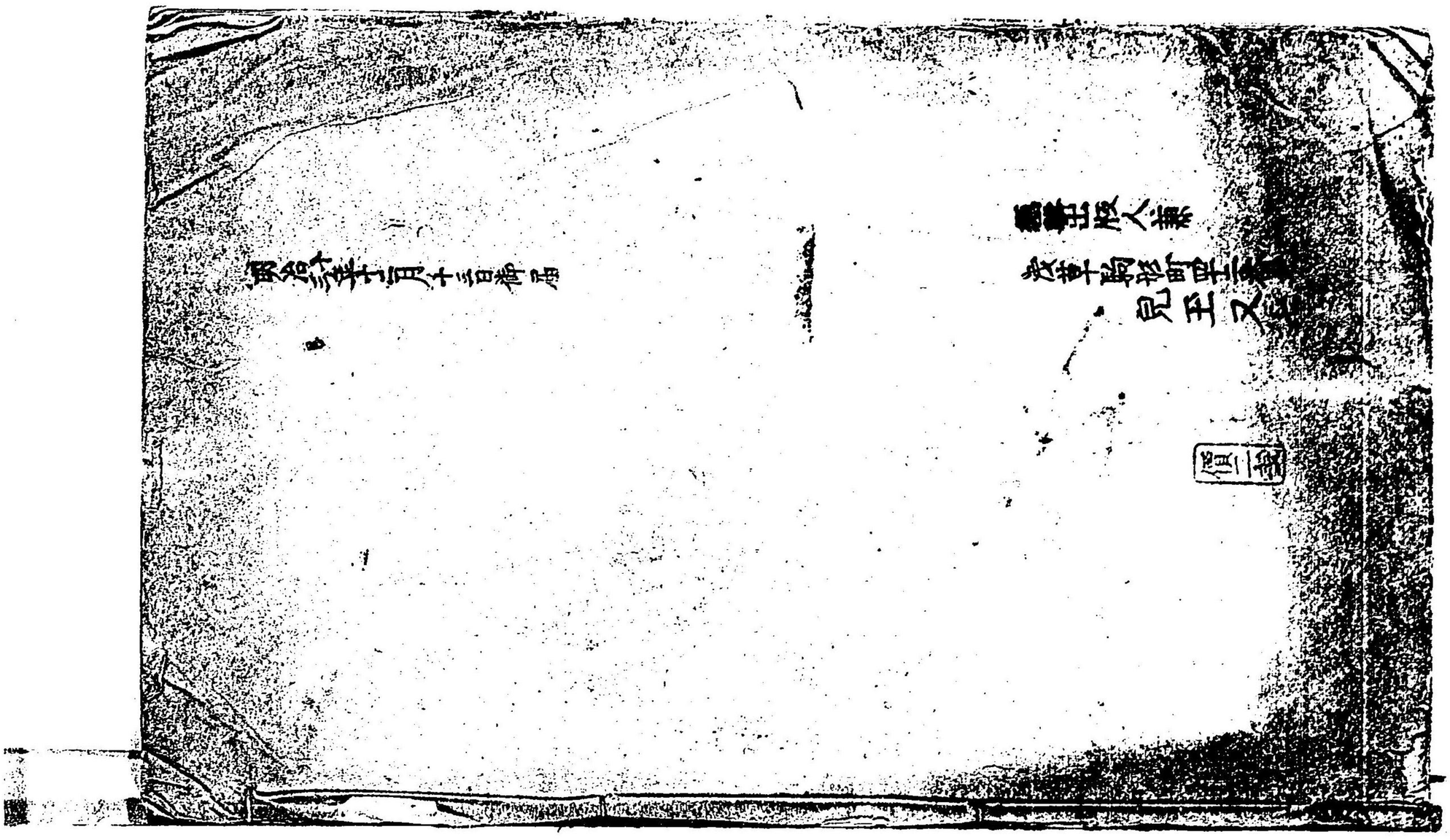
前九賀の国安倍川を冒堅の助ゞ新関を咎めらるも弁慶臨氣應変の辯を振ひ勧進帳の空讀をして主君を扞禦り関守を謀り虎の尾を踏の思ひをして此所を過北国路へ出て辺ろを入り多賀ゝを再び曽を逞ふく奏ひ没して後鎌倉太郎国衡次郎泰衡次郎忠衡父の遺言を守り義経を守ゞ奉ると雖ども鎌倉より大軍さゝ向けらるゝ年とへて竟に高舘も落城を及びゝ義経我が似寄の者として自殺させ首を鎌倉に送る頼朝舎弟と見て怒りつゝ藤原父子の身の上を及ぶ文衡舘次郎と初め其外

○海道北海道ぞ地有と知て自ら案内者と成て青森より

□主従船ゝ乗り出国と切従ゝ国王と称ふ後義経大

亡び弁慶衣川に立往生

偽りの為り其外皆夫々に討死

時に文治三年義経年三十一歳常陸坊

明神と尊む本朝を八武器に於て此將の右に出る者ハ有まゝと思る名將也